新春特別インタビュー企画

文化勲章受章・清瀬市名誉市民

澄川喜一

Sumikawa Kiichi

「そり」とか「むくり」っていうのは、日本独特のものがあるんです。日本的に一番美しい。

令和2年11月3日、清瀬市名誉市民である彫刻家の澄川喜一氏が文化勲章を受章されました。この偉業をお祝いするとともに、改めて澄川氏について市民の皆さんにも知っていただくべく、令和2年12月上旬、アトリエにてお話を伺いました。そのインタビューを新春特別企画としてお届けします。問秘書広報課広報広聴係☎042-497-1808

椎名町から探して、だんだんだんだん奥地に来て（笑）

――このたびは文化勲章受章、誠におめでとうございます。

ありがとうございます。本当に突然だったからね。（事前に）報告なんかもなくて（笑）。

――そうなんですね！　今日は貴重な時間をいただき、澄川先生のこれまでの活動や作品のこと、清瀬についてなどを伺っていかれたらと思います。

はい。清瀬は長いよね。もう60年近くいるんじゃないかな。清瀬町で、「市」じゃなかったから（笑）。

――ちょうど市が始まって令和2年で50周年なんです。

そうですよね。東京藝術大学にいたときに独立して、アトリエを作ろうと思ってね。「土地買った方が良いよ」って言われて。で、親父にこれ（資金）を出してもらって、（西武池袋線）椎名町から探したんだけど、なかなかなくてね。親父にもらったお金に合う場所が見つからなくて、だんだんだんだんと奥地に来て（笑）。そのころはね、清瀬までが複線だったんです。で、ここから乗り換えて奥に行くには単線になっていたんです。僕が最初、清瀬を見に来たときには、たしか2両編成で、1両が肥たご（※注：肥溜めのこと）を運ぶ車両だったんだよ。当時は畑でしょう。途中で降ろして肥やしにしてたんだ。当時は「武蔵野線」（※注：武蔵野鉄道のこと）って言ってたんですよ。駅前にね、大きな穴があって、みんながそこに肥えを集めていたんです。本当だよ（笑）。

――椎名町から探されたとのことですけど、この沿線に選んだ理由はあったんですか？

この辺が一番土地が安かったような感じがしたね。我々の場合は、アトリエを持たないと相手にされないから。彫刻家なんか、自分の仕事場がないと。そういうのがないとだめなんですよ。そう言われて、親父にねだってね。

――若いうちにアトリエを構えるのは、途方もない勇気も必要だったのではないですか？

それまでは学校関係にいて、居候みたいな感じだったけど、やっぱり独立しないとだめだよって、そのころ指導していただいていた方が言ってくれて。彫刻家はそういう仕事場を持って、見せるものを作ってっていうことをやらないと認めてくれませんよね。

「俺の真似をするなよ」って。重いでしょ？

――小さいころから絵がお得意だったそうですが、ご両親や兄弟、親戚の方などに絵が好きな方、得意な方がいらっしゃったりしましたか？

遠縁で、行方不明になったような人で絵を描いている人がいてね。親戚はね、「ああいう風にはなるな」って。美術なんかやるな

Profile
澄川喜一（すみかわ・きいち）
昭和6年、島根県鹿足郡六日市町（現吉賀町）生まれ。昭和26年、山口県立岩国工業高等学校機械科を卒業。昭和27年、東京藝術大学に入学、平櫛田中教室にて塑造を学ぶ。昭和54年、ライフワークとなる「そりのあるかたち」の製作を開始。以後、作品製作と並行し、東京湾アクアライン川崎人工島「風の塔」や「東京スカイツリー®」のデザイン監修など、大規模なプロジェクトにも参加。平成24年、清瀬市名誉市民に選定。令和2年11月3日、文化勲章を受章。
◆公式ホームページ
http://www.sumikawa-art.com/

って（笑）。

――絵が好きだと気づいた、一番小さいころの記憶は？

記憶に残っているのは、小学校のときの女性の先生が絵が上手だったので、その先生の顔を描いた記憶があるんですよ。それを認めてくれて。それでそっちの方へそっちの方へってなったんだと思います。女性の先生だったから、ちょっとキレイに描いたんだと思いますよ（笑）。

――さすがです（笑）。小学校当時は、まだ戦時中ですよね。

そうです。兵隊さんの絵ばっかり描かされていました。「慰問袋」っていうのがあってね。兵隊さんが外地へ行くときに、必要なものとかを入れるもので、それにね。

――そんな時代ですから、芸術で食べていくっていう決意はなかなか理解されづらい空気だったろうなと想像できます。

美術系に行くって言ったら、親戚中が反対だったもんね（笑）。でも東京藝術大学っていうのもなかなか受かる学校じゃなくてね。そのころは（入学できる）人数も今みたいに多くなくて。小さい学校で、それに大勢が応募するもんだから、定員を増やせっていう運動もあったみたいだからね。要するに普通の学校じゃない、「美術学校」だからね、歴史もあるんだけど、変な学生ばっかりでしたよ（笑）。

――（笑）東京藝術大学に入学後は、今メインとする木彫ではなく、塑造（おもに粘土を素材とした彫刻）を専攻されたとありますが。

（塑造は）基礎だからね。4年間は塑造で基礎をやることになっていたんです。今は違いますけどね、塑造はすべての基礎だから。粘土でね、造型っていって形を作るところから。

――東京藝術大学を卒業後は、教授として指導にあたります。

いやぁ大変だよね（笑）。自分が教えられて覚えているのは、「人の真似をするな」っていうこと。何でも真似から入るけど、それだけじゃないっていうことをね、だいぶ後になって気付いたっていうか。刃物を研いだり粘土で形作るっていうのは手業（てわざ）、技術だから、優秀な人がいればそれを見て覚えるけど、それだけじゃないよと。その意味は卒業してからわかったんだよね（笑）。真似じゃなければどうしたらいいかっていうね。

――シンプルですが、深い教えですね。

平櫛田中っていう先生でね、「俺の真似をするなよ」って。言葉少ないけど、重いでしょ？　真似をしなきゃいけないけど、真似じゃない。この意味に卒業してからわかって、びっくり仰天して、やめちゃったりね（笑）。

――「才能」というのは、指導や教育によって目覚めさせることはできると澄川先生は思いますか？

う～ん……難しいよね。良く見るとわかるんだ。学生の定員が少なかったっていうのもあるけど、「こいつはいけるなぁ」って。20歳すぎたらわかるもんなんだよね。でも、言わないけどね（笑）。言っちゃいけないんだ。

全部自然界にあるものなんですよ。

――清瀬のけやき通りには、澄川先生の作品も展示している「キヨセ ケヤキ ロードギャラリー」があります。

僕もお手伝いさせていただきました。当時市から、どういうのがいいかって聞かれたりして、ご意見を出させていただいたり。まちづくりっていうことで、よそからよく見に来てましたよね。

――このケヤキ ロードギャラリーにある「そりのあるかたち'90」以外にも、市内には澄川先生の作品をいくつか見ることができます。それぞれについて、改めて教えてもらえますか？　まずは中央公園にある「平和の塔」についてお願いします。

戦没者、戦死者の慰霊塔なんです。（清瀬でも）何百人も死んでいるんだよね。木の杭みたいなのが立っていたんだけど、なんかやろうっていうことでデザインしました。とても良い石があって。小松石っていう原石をここ（中央公園）に持ってきて作ったんだよ。

――続いて、清瀬けやきホールにある壁面レリーフの「清瀬の流れ」と「日月」についてです。

「清瀬の流れ」は柳瀬川、川の流れ。（柳瀬川は）いいところだよね。清瀬っていう名前ともぴったりで流れがあって、それをイメージして。「日月」は、太陽と月。どっちを太陽ととらえてもらってもいいですよ。

――ケヤキ ロードギャラリーにある「そりのあるかたち'90」は、代表シリーズのひとつです。

これは、黒御影石ですね。大きな塊から削っていって。

そのなかにそりとかが見えてくる。木と仲良くならないとできない。

――このシリーズは47歳のときに初めて発表し、1979（昭和54）年に『そりのあるかたち-1』で平櫛田中賞を受賞されました。以後、ライフワークとして取り組んでいらっしゃいますね。

そうだね。例えば中国の屋根の形とか、すごくギューっと反るんだよね。でも、日本はすごく抑えている。これは日本的に一番美しいことをしているなと。ニューヨークで「そりのあるかたち」の個展をやったとき、アメリカの方々に説明ができなくて。英語にすると「そりのあるかたち」って長いんだよね（笑）。アメリカの方には、日本刀を見せて説明して。要するに「そり」とか「むくり」っていうのは、日本独特のものがあるんです。さっきも言った屋根の形とか、あと富士山の流れみたいなものはね、日本独特のものがあるなって僕には見えて。それがおもしろいからテーマにしているんです。

――日本の伝統的な美しさを追い求めているんですね。

うん。古い大工さんは木造建築をやるときに、山の南側に生えている木と北で育った木では違うから、南側で育った木を一番大切にするとか。で、そういうのを考えると、木は生きているから、木の年輪を見るとどっちが南を向いていたかとかが分かって、そのなかにそりとかが見えてくるんですよ。木と仲良くならないとできない。昔の大工さんは良いこと言ってるよね（笑）。

――澄川先生は、多くの建造物のデザイン監修もなされています。

東京湾のど真ん中にある「風の塔」（東京湾アクアライン内の換気施設）なんかも、日本の考えを入れるようにしているんですよ。あとね、あれは「すきま風」がおもしろいんですよ。ある大きさのものの接近ですきまを作ってやると、「すきま風」ができる。すきま風っていうのは強いでしょう？　その風圧で、下（トンネル）の換気をするんです。（建造物も）いろいろ呼ばれてやったけど、僕はデザインと（機能も）合わせて考えたほうがいいよって。“機能によるデザイン”なんですよ。

――澄川先生といえば、東京スカイツリー®のデザイン監修も忘れてはいけない大事業ですね。

あれは日本の溶接の技術のおかげです。でもね、（デザインは）全部自然界にあるものなんですよ。崖から落ちる水とか、木の生い立ちとか、みんな（自然界に）あるんです。

――令和2年はいろいろなことがありましたが、澄川先生にとってはどんな1年でしたか？

よく認めてもらったなぁっていう1年です。名前忘れちゃったけど、何とか章っていうのももらったり（笑）。清瀬もね、文化的なことをやっていってね。「清瀬」っていう名前も美しいから、大事にして、素晴らしいまちになっていってほしいですね。

――今後も作品を楽しみにしています。

いやぁ、もうないよ（笑）。

澄川喜一氏の文化勲章受章祝賀会を行いました

令和2年12月13日、アミューホールにて文化勲章受章祝賀会を執り行いました。当日は、新型コロナウイルス感染症対策を十分に施したうえで、市議会議長をはじめ、市議会議員や市内関係者をお招きし、澄川先生の文化勲章受章を祝福しました。